

## 考えるとき話しているのか

——フッサール「独白」概念をめぐる——

京念屋 隆史 (法政大学)

kyonenya.takashi@gmail.com

### はじめに

ひとは考えるとき何をしているのか。例えば風呂の中で明日の予定について考えている人は、お湯の暖かさの感覚をもち、自分の手足が視界に映っているかもしれないが、しかしこうした現実が起こっている事柄は彼の思考内容とは何の関係もない。さらには思考する人をこのように外から眺める視点をとらず、まさに私が思考しているときには、ただ思考された世界だけが現象しており、こうした目の前にあるものごとは何も意識されていない。だとすればなぜ、何も現実と関係のない事柄について、いま現実思考することができるのだろうか。

この問いに対する答えとして、我々は人と話すときだけでなく思考するときにも心の中で言葉を使っているからだ、というものがありうる。内語は思考とその意味内容において密接な関係をもち、かつそれが心の中で見られていることによって対象へと向かう思考を現実において媒介しているのだ、と<sup>1</sup>。

しかし本発表はむしろ、思考が内的言語によるという見方に対する、次のような疑念から出発してみたい。例えば柏端 (2016) は「思考は頭の中にあるが言語は (たぶん) ない」と題された節でこう述べている。「独言や内語の存在を否定するつもりはない。〔中略〕だがこれは思考の一種なのだろうか。心的表象の一種なのだろうか。私にはこれは、どちらかといえば、身体表面にはつきりと現われない発話行為の一種であるように思われる」(柏端 2016, p. 99, 註15)。私はこの問いを次のように言い換えてみたい。確かに我々は心の中で言葉を発することはある、だがそれは考えることと事実似ているだろうか。考えるとき絶えず心の中で独り言を呟いているというのは——思考が媒介なしに世界に届くというのと同じくらい——何か不自然な見方ではないか。それはせいぜい話しながら考えているというだけで、決して考えることそのものにはならないのではないか。

にもかかわらず本稿は、思考を直接成り立たしめるような言表があることを主張する。そしてそのために、内的な言表の中には上述のような発話ではないものが、つまり「私が話す」ものとは異なる言表の経験がある、という可能性を考える。このため本稿の議論は一貫して、(内的発話を含めた) 通常の発話と内語との間の差異の探究へと向かう。本稿

---

<sup>1</sup> それは例えばデリダが「声 (voix)」と呼ぶものである。哲学史においては伝統的に、思考とは何らかの対象や概念をいかなる媒介もなしに捉えることだとされてきた。しかしデリダはそれを「超越的所記 (signifié transcendantal)」の誤謬であると断ずる (cf. Derrida 1971, p. 30)。言語表現から独立に存在し思念されるような概念なるものを想定する見方は、この声の現象を、ある気づかれがたい内的な記号の存在を見落としてきたのだとデリダはいう。

はまず、『論理学研究』第一研究のフッサールが「独白」に与えた、「告知」の機能を持たない言表であるという規定を明らかにする（第1節・第2節）。そしてこの独白の非告知性を、デリダが「声（voix）」に与えた「自分が話すのを聞く」という特徴づけを手がかりに、別の角度から考察する（第3節・第4節）。

## 1 表現と告知

### 1-1 「思想」の二義性

フッサールによれば、通常、言葉は「意味機能」に加えて「告知（Kundgabe）」の機能をもつ。意味機能とは、「SはPである」という言葉（例：明日は晴れである）が〈SはPである〉という意味内容を表現することである。これと対比されるのが告知機能であり、誰かが「SはPである」と言えば、その言表は「彼は『SはPである』と考えているようだ」ということを指示する（その指標となる）ということである。フッサールはこの告知機能について次のように述べている。

「[...]」すべての表現は伝達的言表においては指標として機能する。そうしたすべての表現は聞き手にとっては、話し手の「思想」を、すなわち話し手の意味付与体験を表わす記号として「[...]」役立つ。このような言語的表現の機能をわれわれは告知機能と呼ぶ。（Hua XIX/1: 33, I-§7, 強調引用者）

ここで話し手の「思想（Gedanke）」と呼ばれているのは、聞き手によって話し手に帰属させられる、「彼がそう思っているらしい」ところの考えのことである。コミュニケーションはこうした言表の告知機能に基づいている。というのも告知は、話し手が自らの思想を言葉へと表明すること（Äußerung）と厳密にセットで機能するからだ。すなわち、話し手は思ったことを言い、その言われたことが翻って彼の思っていたことを指し示すという仕方、表明と告知とは同じ事柄の二側面なのである。この点には何度か立ち返ることになるだろう。

ところで、ドイツ語の„Gedanke“という語は、例えばフレーゲにおいてそうであるように、文が意味している当の意味内容そのものを「思想」と呼ぶことがある。フッサールが、他人への伝達においては「思想は意味という仕方、で表現されるだけでなく、告知によって伝達されもする」（Hua XIX/1: 36, I-§8）と言うときにも同様の二重性が含意されている。そこで本稿では、一方で、告知される現実的作用としての思想を『思想』と記し、他方で文が意味し主観が思念するような理念的内容としての思想を〈思想〉と記し分けることにする。私の見るところ、こうした両義性は両者を峻別すること以上に重要であり、そのニュアンスづけを残しておきたいと思うからである。

### 1-2 声の無人称仮説

ここで、告知される『思想』と区別された、意味される〈思想〉のあり方を明らかにしておきたい。フッサールは次のように述べている。

われわれが言明の反復のうちで同一のものとしていつでも明証的な意識へともたらしうようこの同一の意味のうちには、判断作用〔Urteilen〕や判断者〔Urteilende〕はまったく見出されえない。（Hua XIX/1: 43, I-§11）

この「判断作用や判断者がまったく見出されない」というあり方こそが、意味すなわち〈思想〉に固有のあり方である。告知される『思想』はかならず話し手の思想であったのに対して、言表が意味する思想は話し手のものではない。あるいはより根本的に捉えるなら、〈思想〉のうちには思考する私はまったく見出されないのだから。

こうした意味の理念性はしかし、独白という事例にふさわしいように再解釈されなければならない。というのも通常それは、独白ではない普通の話された言葉について、それがいつ誰に言われても同一の内容をもつこととして理解されてしまうからだ。話し手が「SはPだ」と言い、われわれがその意味内容〈SはPであること〉を捉えるときには、それを言ったのが彼であることを差し引いて捉える。しかし、もし独白があらかじめ告知機能を持たないのだとすれば、その意味機能をこのような引き算的な発想によって捉えることはもはやできない。

〈思想〉の理念性——非人称性というよりむしろ無人称性——に対して、独白は、あらゆる現実的なもののうちで最もふさわしいものでなければならない。そこで私は次のような読解仮説を立てる。すなわち、思考された意味だけでなく、それを意味する言表のうちにも、発話していること（Sprechen）や話し手（Sprechende）がまったく見出されないのだから。言い換えれば「独白」とは、心の中で私が話している言葉ではない。

## 2 心的言表の分類学——独白とは何ではないか

### 2-1 告知を伝達から区別する——想起された発話

フッサールにおいては、独白の非告知性はおそらく誤った根拠をもとに自明視されている。これに関してデリダは、フッサールの議論を要約しつつ次のように批判している。

よく認めておかねばならないのは、表現と指示の区別の基準が、結局のところ「内的生」についてのきわめて簡素な記述に委ねられているということだ。すなわち、そうした内的生においては**伝達が存在しないがゆえに指示は存在しないだろうし、他我が存在しないがゆえに伝達は存在しないだろう**、というのである。（VP: 78/133f., 強調引用者）

フッサールの誤りは、「指示（indication）」すなわち告知機能を、他人への伝達と同一視していることだ。しかし伝達に関してならば、言表に何も伝達させないためには、ただ単に、他人に聞こえないように、「心の中で」表象するだけで十分ではないだろうか。より正確には、想起や想像を含めた準現在化された言表は、他人に聞こえないがゆえに非伝達性の要件を必ず満たす。

しかし非伝達的だが告知的であるような内的言表はいくらでもある。例えば、あのとき彼はこう言っていた、と想起された言表は必ず、彼がそのときそう思っていたことを告知している。つまり、そのように告知される彼の『思想』が彼の言表へと表明されていたのだ、という仕方で過去の言表を捉えるだろう。そして告知機能は、その話し手が他人ではなく自分であった場合にも例外なく機能する。だから自分の過去の発言は、そのときの自分がそう思っていたということの、その『思想』の指標として役立つだろう。本稿はこのことを「自己への告知」ないし「自己告知機能」と言い表す。このことは告知の外延が伝達の外延よりも広いことを示す重要な事実である。

## 2-2 想像された発話

さて、「独白」ということでフッサールの念頭にあるのは、想起ではなく想像された言表であった。想像が想起と異なるのは、想起された対象は過去の実在であるが想像された対象は実在しないという点、つまり存在定立の無さという点に尽きる。

しかし、この非定立性が非告知性へと直結するわけではない。想像された言表の中にもまだ告知機能を持つものがあるのだ。例えば、ある言表を過去に彼が言ったことだと思っていたが、他の証拠と突き合わせるとそれは記憶違いであり、自分が想像の中で彼にそう言わせていただけだったと判明することがありうる。これは存在定立が外れて想起が想像へと移行する例であるが、この移行においてもなお、準現在化されたその言表は彼が言わんとすることの表明であり続けている。違いはただ、その話し手が現実の彼であるか架空の彼であるかという点にしかなく、彼が発話者でありその『思想』を表明している、という構造そのものにはいかなる変化もない。つまり言表が指標として機能しないためには、実在するものとして想起されても、実在物として想像されてもならないのである。こうした告知機能をもつ心的言表のことを、本稿では独白ないし声と区別して「想像された発話」と呼ぶことにする。

こうした想像された発話はおそらく、次のようなフッサールの例示の中にも混入している。

確かにある意味ではひとは孤独な言表においても話している、またその際確かに自分自身を話し手として統握することもできるし、それどころか場合によっては自分自身に話しかけている者として統握することもできる。例えば誰かが自分自身に対して「お前は悪いことをした、これ以上そんなことをしてはいけない」と言うような場合である。しかしこの場合ひとは本来の意味で、すなわち伝達的な意味で話しているのではない。ひとは自分に対して何も伝達してはおらず、ただ自分自身を話し手および伝達者として表象しているにすぎない。(Hua XIX/1: 36f., I-§8)

ここでのフッサールの関心事がたかだか伝達に関するものである限り、本稿はそれに異論を持たない。しかしこの「お前は悪いことをした」が告知機能をもつこと、つまり私の『後悔の意』の表明であることは明白ではないだろうか。というのも主観は自分に話しかけながら「自分自身を話し手および伝達者として表象」(ibid.)しているからである。こ

のとき「お前は悪いことをした」というのはその私という話し手が持っている『思想』として表象されることになるだろう。その限りで、この内的な話しかけは独白ではなく想像された発話に分類されるべきなのである<sup>2</sup>。

## 2-3 「孤独な心的生」とは何か

これまで見てきた告知機能をもつ言表のタイプを、一般に「発話」と呼ぶことができる。発話の特徴は、言表文の表象に加えて、その発話者が共に表象されるという点にある。別言すれば、言表の表象が与えられたなら、その話し手を世界の中から一人選んで探し出してくる必要があるのだ。そしてこの選別プロセスは話し手としての自己を他者と同列に扱う (cf. 本稿2-1)。かくして発話は言表と言表者がセットになった複合表象になる。

だからフッサールのいう独白とは、この意味での「発話」であってはならない。このことを見るには、独白と想起された発話とが入り混じる次のようなケースを見るのがよい。例えば考えながら議論していた相手の発言が念頭に浮かび、しかし「それは違う」と考え、また自分の中でその続きを考えていくとしよう。ところで私は、それは違うと思うとき、それは違うと話しているのではない。というのもそのとき私は彼に言い返しているのではないし、それは違うと考えたうえで、それを意見として表明しているのでもないからだ<sup>3</sup>。私はただ単にそう考えていたのであって、それをまだいかなる行為としても表象していなかったのである。つまりフッサールのいう独白は、その語の見かけに反して、「私が独白している」という表象を含まないものなのだ。

言表が思考する私のものであるためには、いやむしろ〈思想〉を担うためには、他人の発話でも自分の発話であつてもならず、いわば誰のものでもない言表であらねばならない。それは誰にも帰属させられず、どの主体をも選ばないという条件のもとでのみ、思考する私の言表であることができる<sup>4</sup>。このような言表のタイプだけが独白と呼ばれるにふさわしい。その本質は、発話者の表象を伴わない、言表のみの単独表象であること、と要約できる。

---

<sup>2</sup> 内語を想像された発話から区別するという発想を、筆者は永野 (2015) が扱っているような、内語にまつわる現代の心理学的諸研究から学んだ。それらの研究はどれも、心の中で発せられた言葉なら何であれ「内語」であるはずだ、という前提を疑うことから出発している。例えばGregory (2016) は、極めて小声で何かを言うのを想像すること、自分に向かって何かを言うのを想像すること、等々をすべてこの想像された発話に割り振っている。

<sup>3</sup> とはいえ興味深いことに、私は心の中で実際に言い返していることもある。しかしそのために私は、話し手という身分で想像された世界の中へと出て行き、その会話の場面に実際に登場していなければならない。確かに私は話し手であるために、現実の口から言葉を発する必要はない。しかし想起や想像においてこそ、私はその「口」をぜひとも表象しなければならないのだ。

<sup>4</sup> だからフッサールの言う「孤独な心的生」とは、あらゆる他者の不在において、独白している私だけが存在する場のことではなく、他者であろうと自分であろうと、およそ話し手としての主観一般が不在であるような場のことなのである。

### 3 「心の声」の文法学

本節以降では、前節までで示した独白の非告知性をより具体的に、かつ別の角度から究明することを目指す。その発端として私が特別に取り上げて考察したいのは、漫画における思考と独白（モノログ）の描写であり、その「吹き出し」と呼ばれる記法である。漫画の吹き出しには大別して風船型と泡型の二種類があり、風船型の吹き出しは登場人物の通常の発話を表す記法である。そして泡型の吹き出しは人物が考えている内容を、いわゆる「心の声」として表す記法である。

本節はこうした漫画の記法の文法的考察を出発点にとり、私の実際の思考作用を（例えば体験の反省によって）記述することから始めない。その理由は、後に見るように、考えることの現象そのものを直接見ることに或る本質的な困難があるからだ<sup>5</sup>。それは一言でいえば、最も手前にあるものを見ることの困難である。つまり、このあまりに近すぎる現象へのアプローチは、むしろ見るための距離を必要とするのだ。

漫画の記法はこの要求を満たす。漫画においてその距離は、登場人物によって内側から生きられた世界が、無視点的な客観的世界の上にいわば重ね書きされることで実現している。本節の考察はこの二重化された眺めのもとでなされる。

#### 3-1 二種類の吹き出し

漫画の描写の一つの約束事は、読者がその作中世界を、程度の差はあれ、神のような超越的視点から見渡せるということだ。だから登場人物の内面もまた等しく客観的に描かれる。泡型の吹き出しもまたそうした道具立ての一つであり、それは本来なら見えないはずのものを可視化して描く。

ところで、ここで「見えない」とはどういうことか。もちろん当人の思考は他人からは見えないが、しかしそうではなくここで強調したいのは、実は当人から見えていない、という意味での不可視性である。発話を表す風船型の吹き出しであれば、それは自分の口元から湧き出した、世界の中に産出された一個の対象として知覚することができる。しかし泡型はこれと違って、例えば彼の隣に、あるいは部屋の中に存在すると語ることができない。泡型は、そのような対象的な仕方では他の事物との境界づけにおいて捉えられているのではなく、またより重要なことだが、自分の頭から吹き出ているものとして知覚されているのでもない。思考する人物はただ泡型の吹き出しの中身だけを見て、その内で生きているのだ。

さらにもう一つ、特筆すべき差異を挙げたい。それは、風船型のそれとは違って、泡型の吹き出しは必ず、その人が本当に思っていることを表すということだ。つまり、泡型で嘘をつく、といったことは起こらない。実際、そうした場面を見たことがあるだろうか。おそらくないだろうし、そしてまた、ただ偶然そうになっているのでもないだろう。

---

<sup>5</sup> 単なる内的発話ではない、真正の内語を反省することは経験的にもすでに困難を含む。例えばHurburt et al. (2013) は、内語にまつわる当人の報告が実は信用に足るものではないこと、またその内観にはある種の習熟が要することを指摘している。

その理由は、一方ではもちろん作劇上の都合ではある。つまり、発話だけでなく独白も嘘だと仮定すると、漫画の読者からみてその人物が何を考えているのかが分からなくなってしまうからだろう。嘘をついていることを描く最も簡単な方法は、風船型の吹き出しを泡型のそれと内容的に矛盾させることだ。風船型で言わせた内容を打ち消す内容を泡型の吹き出しで言っているなら、読者は泡型の方を信頼し、こちらが本音なのだな、と気づく。だが、まさかその独白もまた嘘である、などとは想定しない。というより、もしそれもまた虚偽であるなら、さらにその背後で誠実に語っている場面が今度は描かれるべきだろう。それが漫画の文法と世界構造に対するある種の信頼である。かくして、「心の声」は嘘であることはできない。漫画の読者は人物の内面まで見渡すことができるので、必ず、その人物が嘘をつかずに本当に考えている場面を眺めることができる。

### 3-2 自己という盲点

だがこれは、単なる漫画の文法を超えた、思考一般につきまとう構造的な制約でもあるのではないか。すなわち、もし独白もまた嘘であるとしたら、今度は自分自身が、自分がいったい何を考えているのか分からなくなってしまうのではないか。漫画において作者は読者に分かるように書くように、思考においては誰もが自分に分かるように考えなければならない。そしてそのために人は、自分がただ発言しているのではなく、それを言うことがまさに思うことそのものであるような、嘘をつけない言葉を使う場面があらねばならないのではないか<sup>6</sup>。

漫画の読者が覗き見ていたのはそうした言語の原光景だった。それは、人の内面をもくまなく見渡せる世界構造の下での特権的な眺めである。ところでこの特権は、誰もが自分自身については現に持っているものではないのか。人は自身の外的な振る舞いから内語に至るまでの完全な文脈をもち、自分に対して隠されたものを持たないのだから。

にもかかわらず、言表が私の思考そのものをなす場面、私がその根源的な言葉を語っている場面、それは自分自身に対してそれとして現前することのない領域なのである。言い換えれば、私の思考がある言葉によって構成されるとき、私は、自己自身を構成しているまさにその言葉を翻って見る——見るという関係に立つ——ことができない<sup>7</sup>。というのも、いま、漫画の中に描きこまれ、読まれているのがこの私であるとせよ。まさにそのことによって、私は通覧する読み手の資格を失って、世界の中に投げ込まれ、そして自己自身は一つの盲点となるだろう。

これが前項で述べた不可視性の意味である。自己のうちには、場合によっては他人には見え、しかし自分からは原理的に見ることはできない不可視の領野がある。そしてこの盲点の存在はある積極的な意味をもつ。すなわち、私は自分の独白の読者であることができず、私の声の「聞き手」であることができないということこそが、人が思考するのを眺め

---

<sup>6</sup> この論点に関して、永井（2013）、特に「嘘をつけない言語としての私的言語」と題された節、ならびに同文庫版p. 215における「嘘のお祈り」の不可能性を参照。

<sup>7</sup> 声にまつわるヴァレリーの断章を論じたデリダの論文「痛み 源泉」（Derrida 1972）の主題は、自分の声をその「源泉」の間近において、その十全的な現前性において聞くことはできない、ということだった。本稿4-2の議論はこの問題意識のもとで展開されたものである。

るのではなく、**私**が思考するための条件なのである<sup>8</sup>。そして、私が自身に対して持っている特権とは、自己の内面をくまなく**対象的に**捉える能力ではないのだ。

## 4 声の源泉の現象学

漫画の文法とその二重化された眺めの下でなされた前節の考察は、独白の非告知性をもつ二つの特徴、すなわち嘘をつけない、自分を聞くことの不可能性、という諸特徴を示していた。本節はこのそれぞれに原理的な説明を与えることで結論に代えたい。

### 4-1 防壁としての告知機能

泡型の吹き出しは風船型と違って、その中身がもっぱら言葉である必要はない。吹き出しの中に言葉ではなく対象そのものを描けば、思考ではなく想像を表すことができる。だとすれば、世界内の諸対象のうちの一つであるところの発話を、その中に描くこともできるはずだ。すると泡型の吹き出しの中に、発話型の吹き出しが入れ子になって描かれることになるだろう。これが本稿2-2で見た想像された発話にあたる。

泡型の吹き出しの中に直に書かれず、風船型の入れ子を介して書かれた言葉は、その主観の思考内容をただちに構成しない。このような間接的な言葉の様態があるということは、例えば嘘をつけるようになること以上の重要な意味を持つ。もし内的な言表が何であれ思考を構成してしまうなら、つまり心の中でただ言葉を表象するだけでもそれが私の思考内容に直結してしまうなら、私は心の中ですらうかつに発言できないことになるだろう。公共の場でうっかり言った発言がその人の思想として把握されるように、うっかり発した内的発話が自分の思想そのものだと自分自身に見なされてしまうのだとしたら。言葉がつねに思想と融即してしまうならば、そのような言語は思考の役にも立たない。

それゆえひとは心の中で意図的に発話することも、自らの『思想』を表明してみることもしなければならない。そのような「独白」は、舞台上で登場人物がする長台詞としての独白に似ている。例えばハムレットは誰もいないところで「言ってみせて」おり、本心からの心情吐露を自己自身に演じてみせてもいる。だからそうした発話は——決して虚偽ではないにせよ——実は額面通り受け取ることはできないものなのだ。

### 4-2 盲点からの触発——声の自己触発

本稿3-2で見たのは、思考と声の現象には、自己であることにとって構成的な盲点、自己への非現前性があるということだった。本項ではこのことを、デリダの「自分が話すのを聞く (s'entendre parler)」という声の規定を手がかりに考察してみたい。

---

<sup>8</sup> ところで（とりわけ現象学的な意味での）反省とは、ここで不可能だとされている眺め、すなわち世界に没入せず、自己を含めた世界をその外側から見るときの眺めのことではないのか。この点について、またそれと現象学的還元との関係については本稿で触れることはできない。本節の議論は、この特殊な反省がもたらす二重化された眺めを、漫画の世界描写がもつ二重性を利用することで代用的に記述したものである。



まず、声は話すというよりは聞かれる (s'entendre) ものとして体験されるという点、それを「私が話す」という能動性から出発して捉えることはできない、という点は理解しやすいだろう。実際、私は考えるときもつばら考えており、それでいわば手一杯なのであって、それを何かに表明することは別の仕事が必要になるように思われる。それだけでなく前項で見たように、話すことは一般に思想そのものに直結しないように体験されるがゆえに、心の中で私が故意に話そうとしたものは何であれ、発話以上のものには、つまり考えることそのものにはならない。

ここには、話すのではなく「聞く」という契機の必要性が確かに認められる。一般に、聞くとは話されたものを聞くことであって、話す過程と聞く過程との間の差異を前提としている。そうした差異が声にも必要となるのだ。内語は、仮にそれが発話だとしても、それを話すことは考える私のしたことではではないように思われる。思考するとは、私が考えかつ話す必要がなく、もつばら話されたものを読むことに専念できる、という状態に近い。別の言い方をすれば、考える者と話す者が一致するのは私が話しながら考えている場合にすぎず、もつばら考えるためにこそ或る差異が残るのでなければならない。

にもかかわらず、声において表現されているのは——私が表明したのではないにもかかわらず——私の思想である、という点に注意しなければならない。つまりこの点で、声の現象は通常の聞くこととしても、その単なる受動性としても捉えることはできない。実際、声を聞くとは、誰かに話しかけられるという経験とも異なる<sup>9</sup>。そこで表現されているのは確かに私の思想だが、それを話している者は見当たらない。正確に言えば、その言表の起点は「誰か」として対象的な仕方で捉えられることがないのだ。

そしてその帰結として、声を聞くことは告知の理解 (Kundnahme) と異なる。通常、他人の発話を聞くときも、私はそれを解釈することで文の〈思想〉を得るが、しかしそれは私の〈思想〉そのものだとは見なしてはならず、その話し手の『思想』として彼に帰属されねばならないものである。しかし声ではまさにこのことが起こるのだ。つまり私が、言表から得た思想を——その起源の不在ゆえに——誰にも帰属させることができず、結果として自分のものにしてしまう、ということが。

ひとは対象化されない、盲点に発する触発を何であれ自己に由来するとして捉えてしまう。というより、そのような仕方で触発するものは自己になる、という方が正しいだろう。かくして、私が産出したのではない言表が「私は考える」を成り立たせ、誰のものでない言表が「自分が話すのを聞く」というある種の能動性として経験されることになるのだ。以上が声のケースであり、すなわち非告知的な意味での聞くことに固有の事象であった。

---

<sup>9</sup> デリダはこのようにやや素朴に結論づけるヴァレリーに疑問を呈しつつ、次のように指摘する。「自我はいわば内的他者性とでも言うべきものと外的他者性との区別を管理する。とりわけ自我は『内部で機能する起源の属性に着せられうる諸偏差』を、絶対的に外部にある源泉へと変形することはない」(Derrida 1972, p. 355 / 214頁)。このように解された受動性は能動性を単に裏返したにすぎず、別の意志の起点を暗黙のうちに導入しているという点に関して、國分 (2017) が示唆に富む。

## 引用文献・凡例

引用文中の強調は断りのない限り原文に属する。また、引用文中の〔 〕による省略および付記は引用者による。訳文は私訳を用い、参照した邦訳の頁番号を（原書頁／邦訳頁）の順に記す。

VP: Derrida, J. (1967) *La voix et le phénomène*, PUF, 1er édition, 1993（高橋允昭訳『声と現象』理想社, 1970）。

Derrida, J. (1971) *Positions*, Les Éditions de Minuit（高橋允昭訳『ポジション』青土社, 1992）。

Derrida, J. (1972) “qual quelle—les sources de Valéry” *Marges—de la philosophie*, Les Éditions de Minuit（藤本一勇訳「痛み 源泉——ヴァレリーの源泉」『哲学の余白』下巻, 法政大学出版局, 2008）。

Gregory, Daniel (2016) “Inner Speech, Imagined Speech, and Auditory Verbal Hallucinations”, *Review of Philosophy and Psychology*, 7(3): pp. 653-673.

Hurlburt, R. T. & Heavey, C. L. & Kelsey, J. M. (2013) “Toward a phenomenology of inner speaking”, *Consciousness and Cognition* 22: pp. 1477-1494.

**Hua XIX/1:** Husserl, E. (1900) *Logische Untersuchungen*, 1. Teil, 2. Auflage, Husserliana（立松弘孝ほか訳『論理学研究 2・3』みすず書房, 2002）〔全集版・邦訳欄外にある原書第二版（B版）頁番号を記し、研究番号をローマ数字で付記する〕。

柏端達也 (2016) 『コミュニケーションの哲学入門』慶應義塾大学出版会。

國分功一郎 (2017) 『中動態の哲学』医学書院。

永井均 (2012) 「語りえぬものを示す(2)——時間を隔てた他者の可能性としての私的言語の可能性」『哲学の密かな闘い』pp. 255-284, 岩波現代文庫, 2018.

永野景瑚 (2015) 『言語性幻聴の説明における内語観の検討』慶應義塾大学修士論文。